

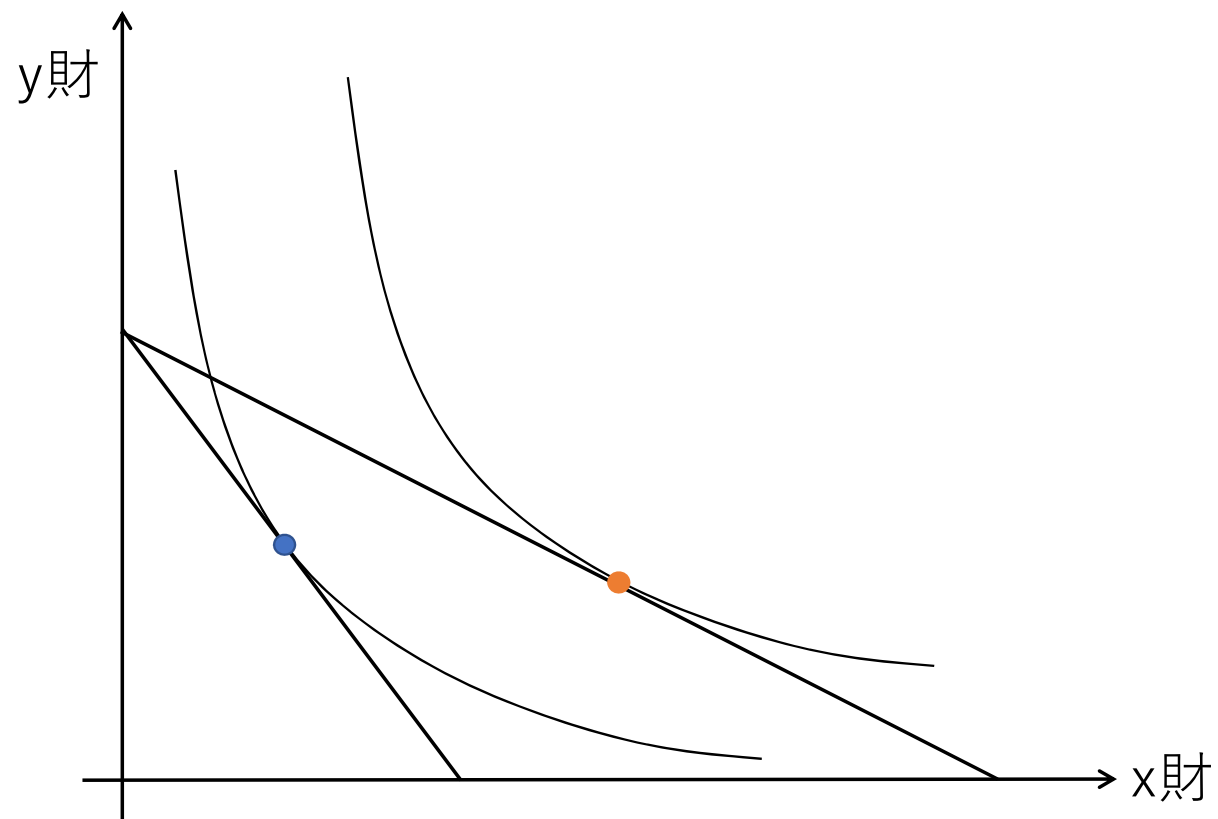
ミクロ経済学A/現代経済学I 第9回「消費者行動理論④」

法政大学 経済学部 平井俊行

需要と価格変化

- 需要関数はそれぞれの価格に対してその価格のもとでの需要量を割り当てる関数だった。
- 価格が変化した場合に需要量がどのように変化するかについて観察する。
- 前回の終わりにx財の価格が変化したときのx財の需要量の変化について観察。
- 今回も一方の財の価格のみ変化した場合を考えるがそれが他方の財にどのような変化を及ぼすかを観察。
 - x財の価格が変化した場合のみ考える。

需要と価格変化



代替効果と所得効果

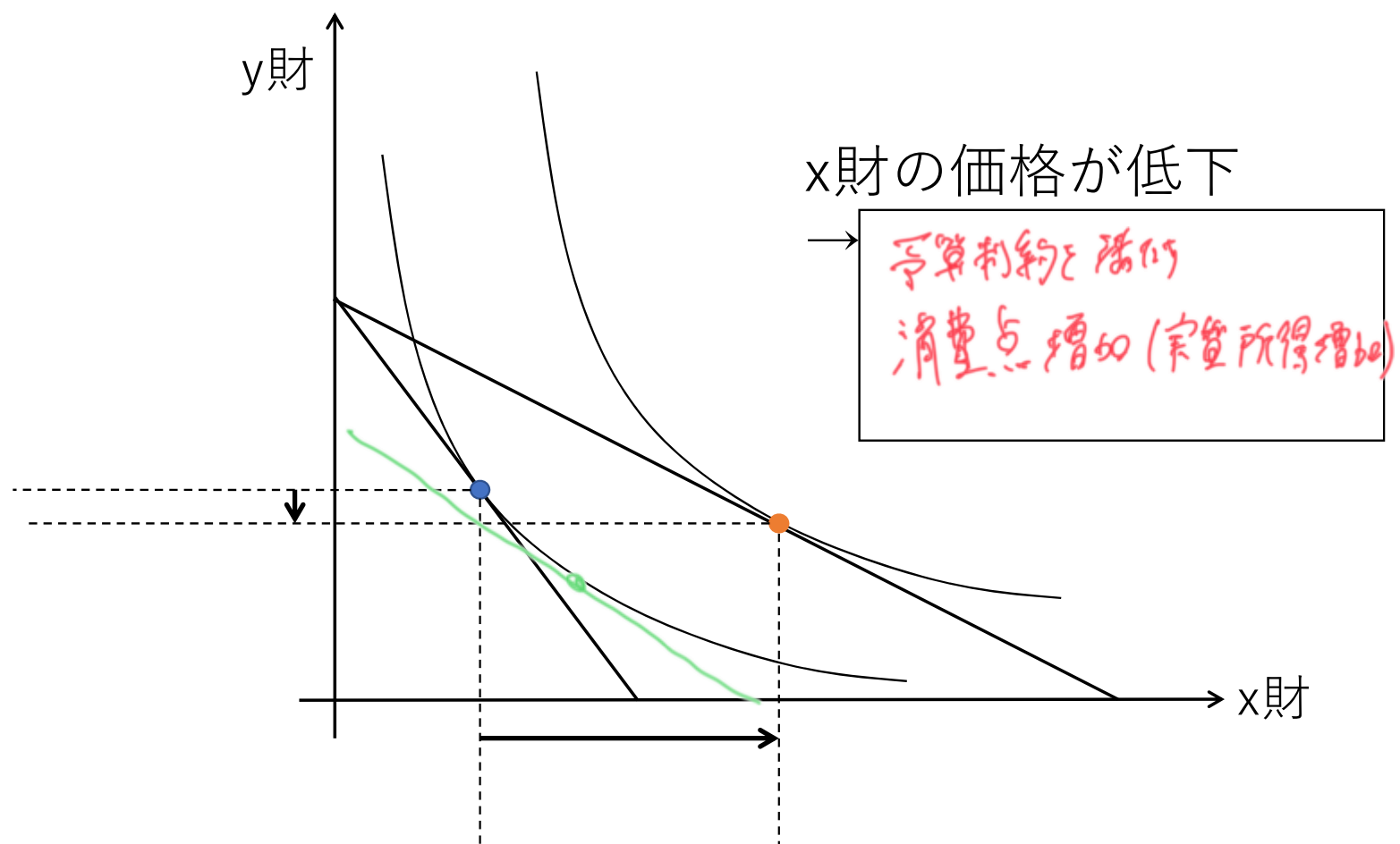
- 一方の価格が変化したとき、その需要量に対する効果は 2 種類に分けられる。

- 価格比の変化による効果
- 実質所得（購買力）の変化による効果

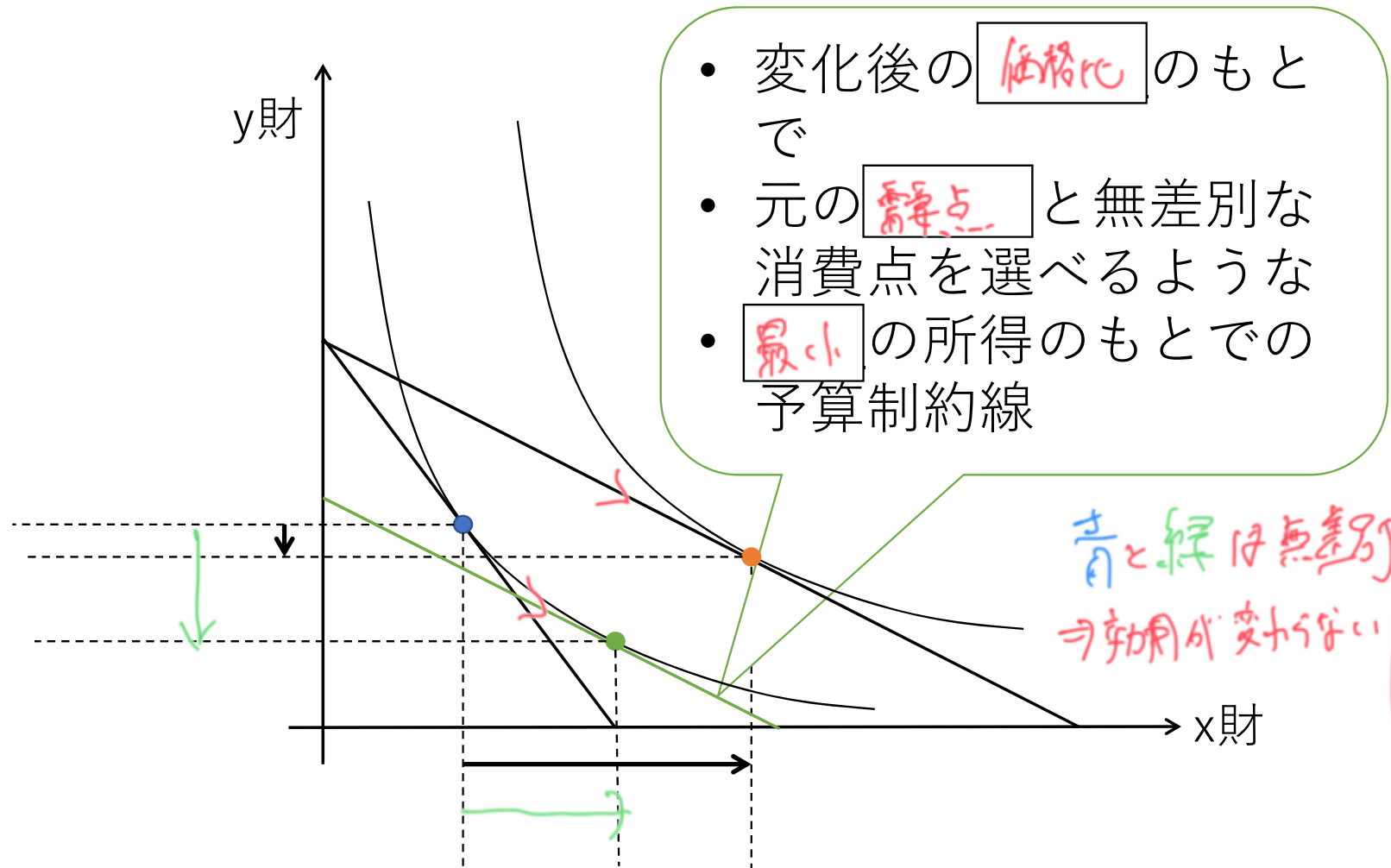
代替効果

所得効果

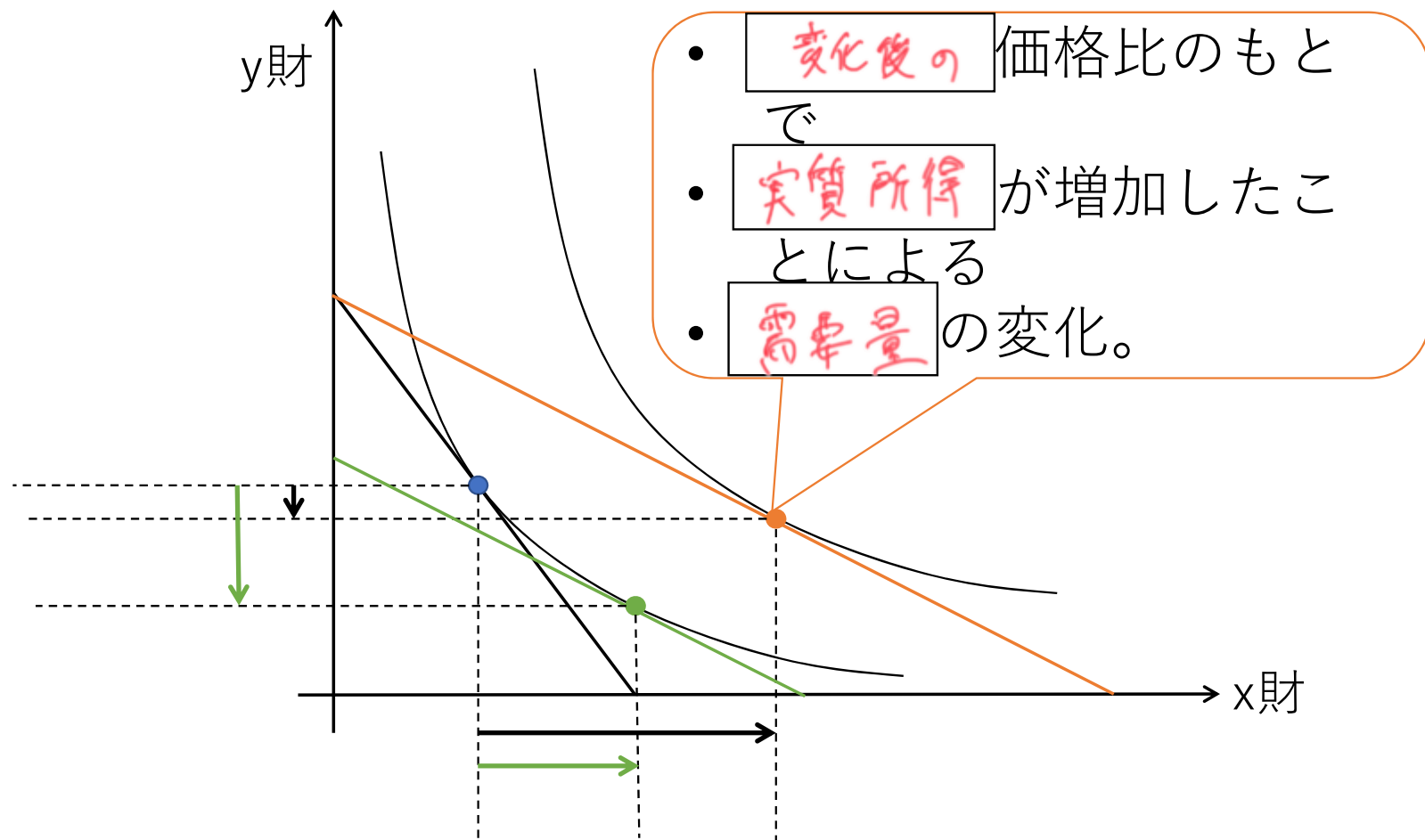
需要と価格変化



代替効果



所得効果



代替効果と所得効果

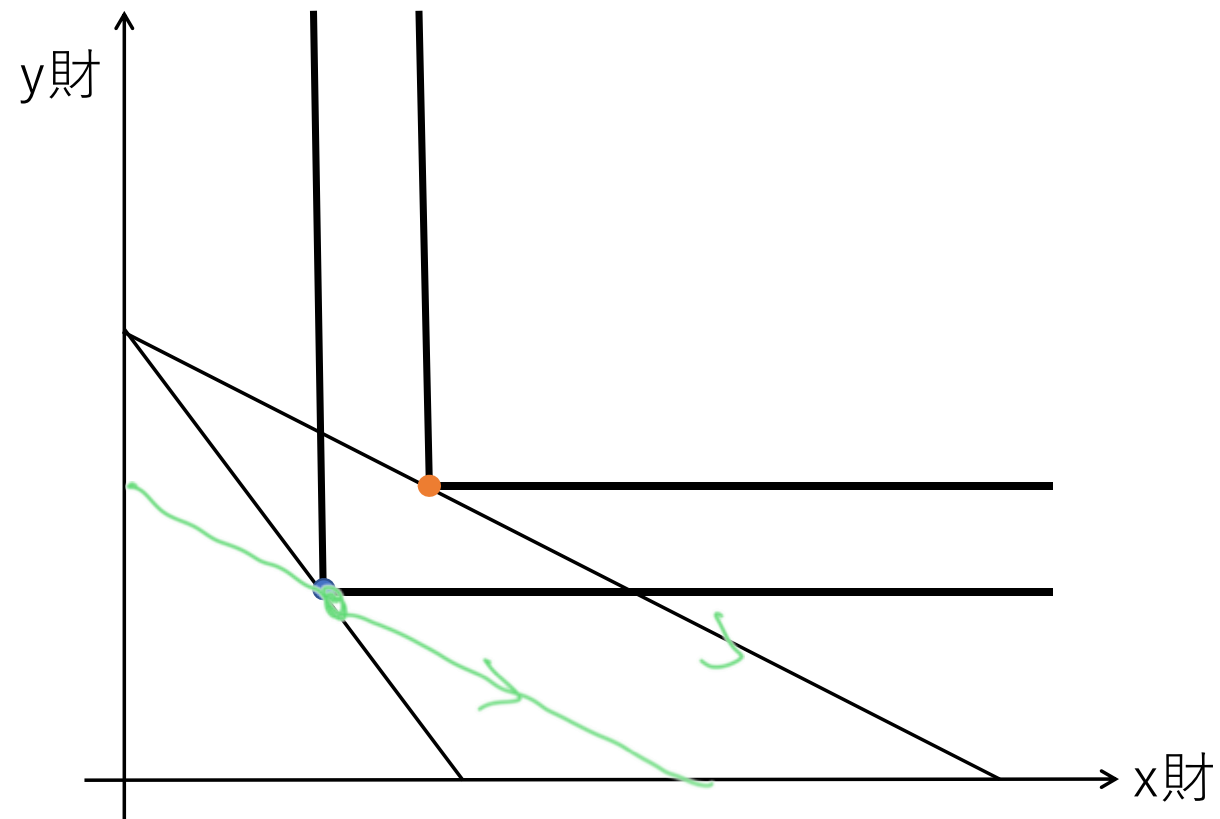
- 今の例では、x財の価格の下落に対して、

- x財への代替効果
- y財への代替効果
- x財への所得効果
- y財への所得効果

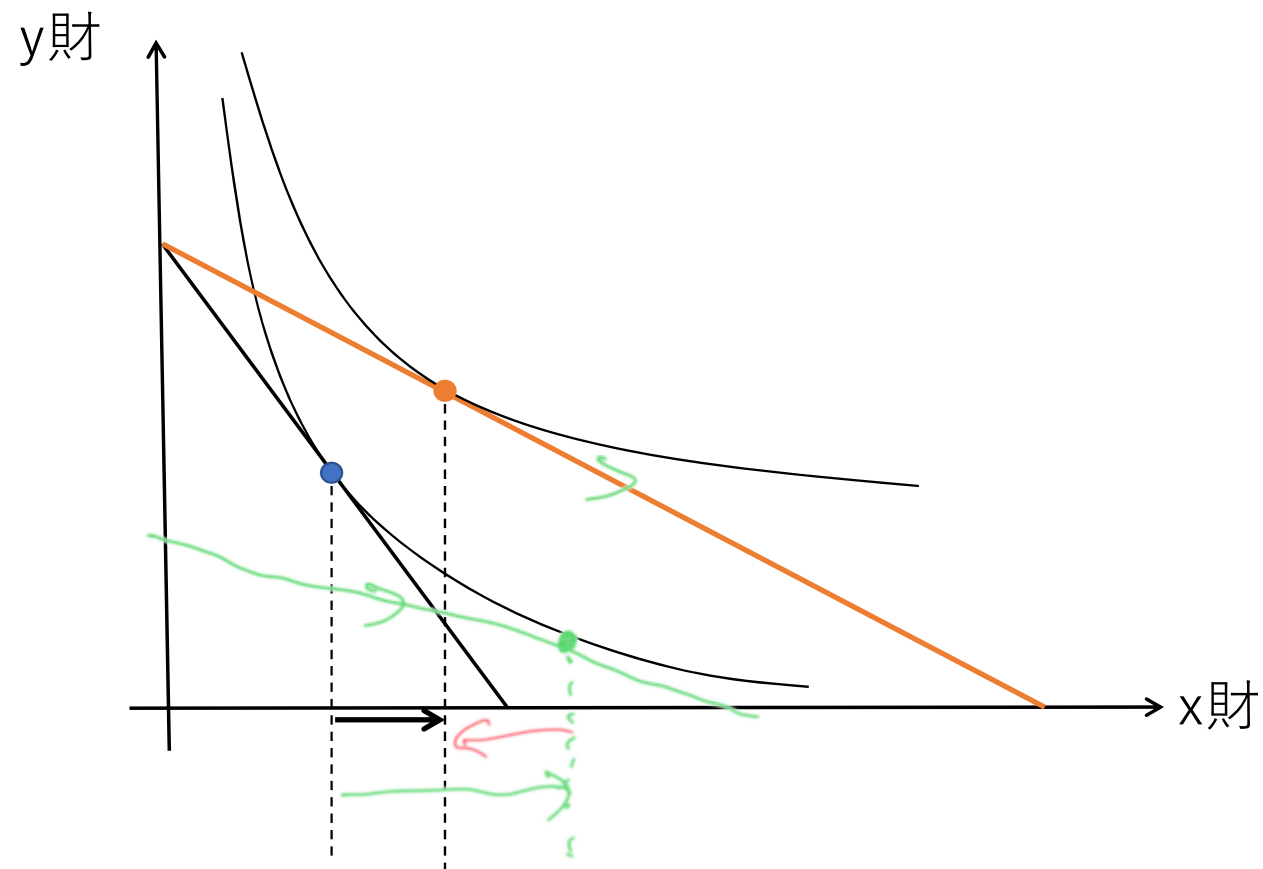
| |
|---|
| + |
| - |
| + |
| + |

- 常に成立するか？
- 代替効果は0になる場合がある。
- 所得効果は負になる場合もある。

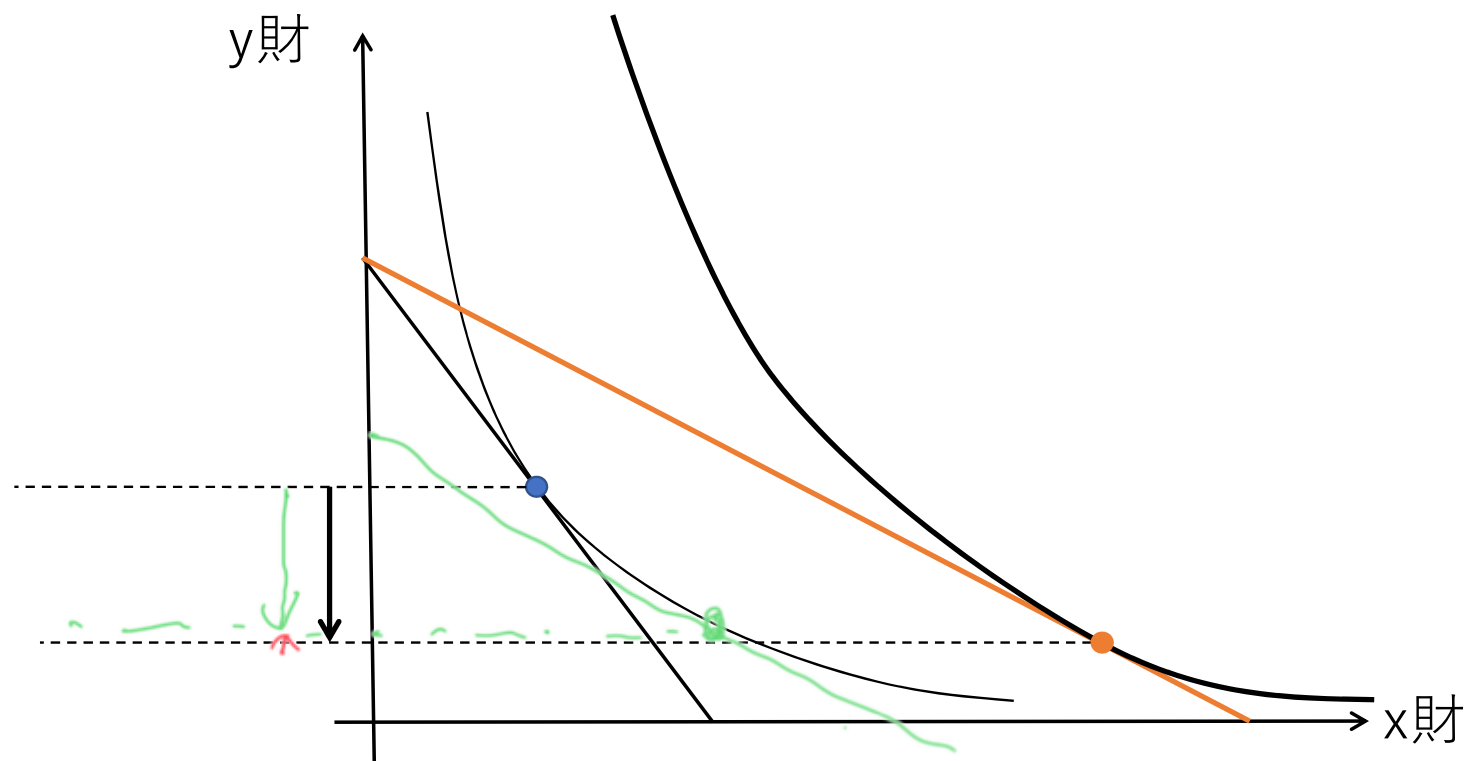
代替効果0の場合



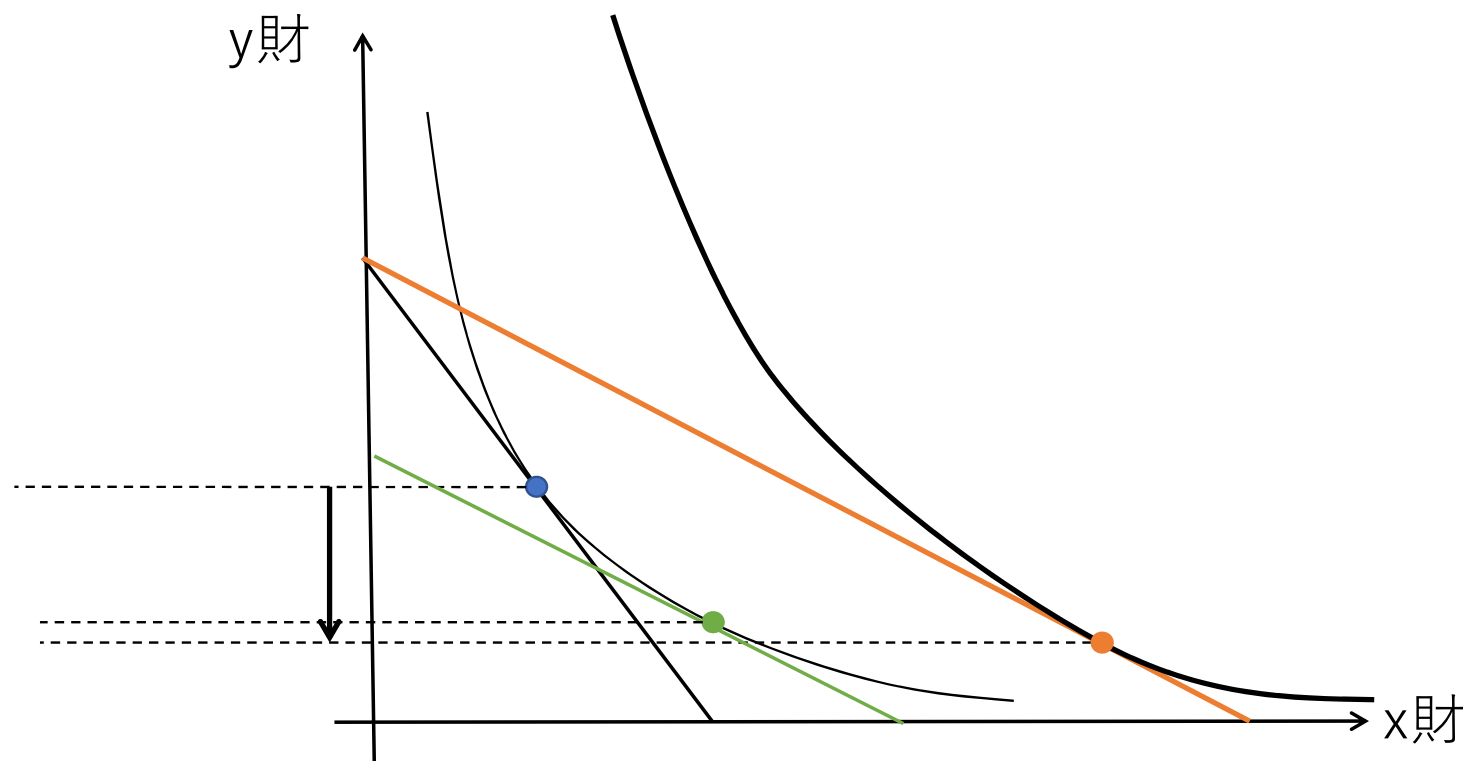
x財への所得効果が負の場合



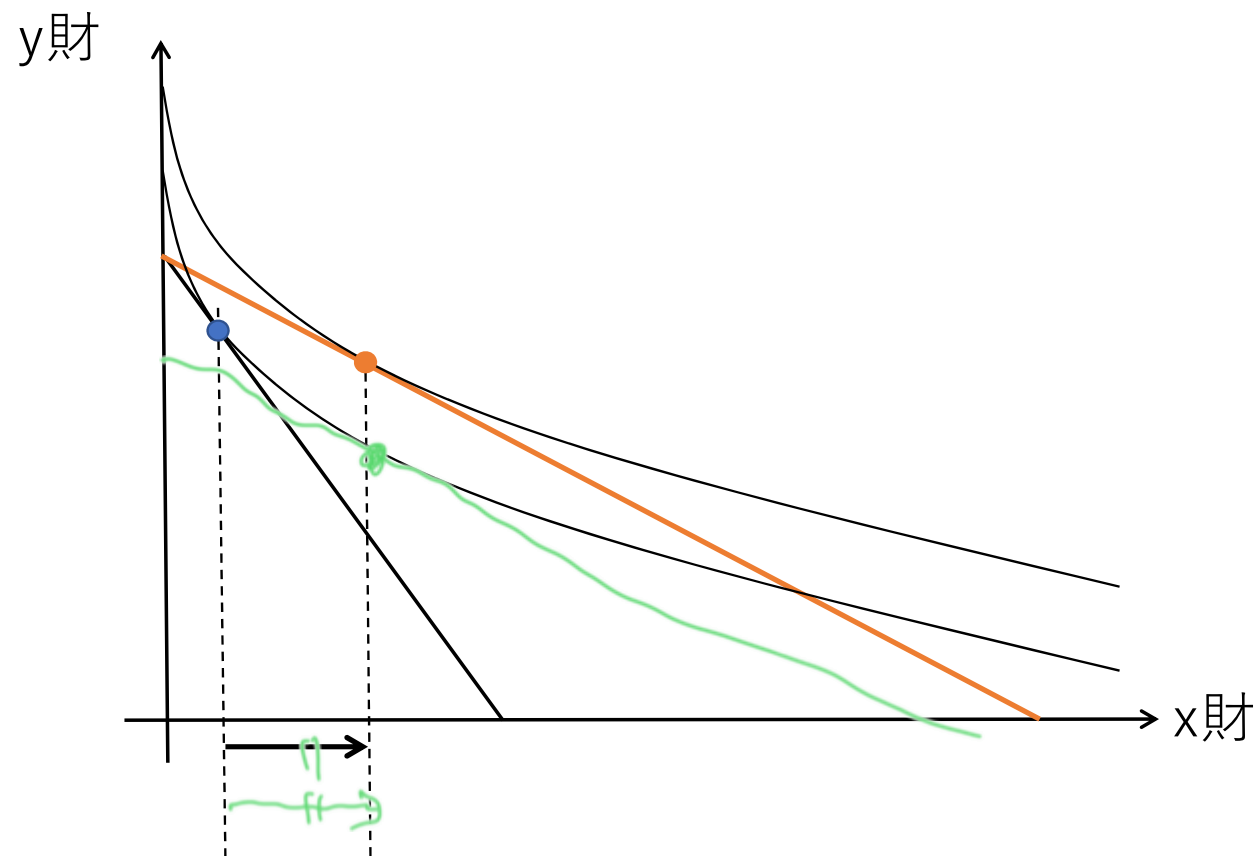
y財への所得効果が負の場合



y財への所得効果が負の場合



x財への所得効果が0の場合



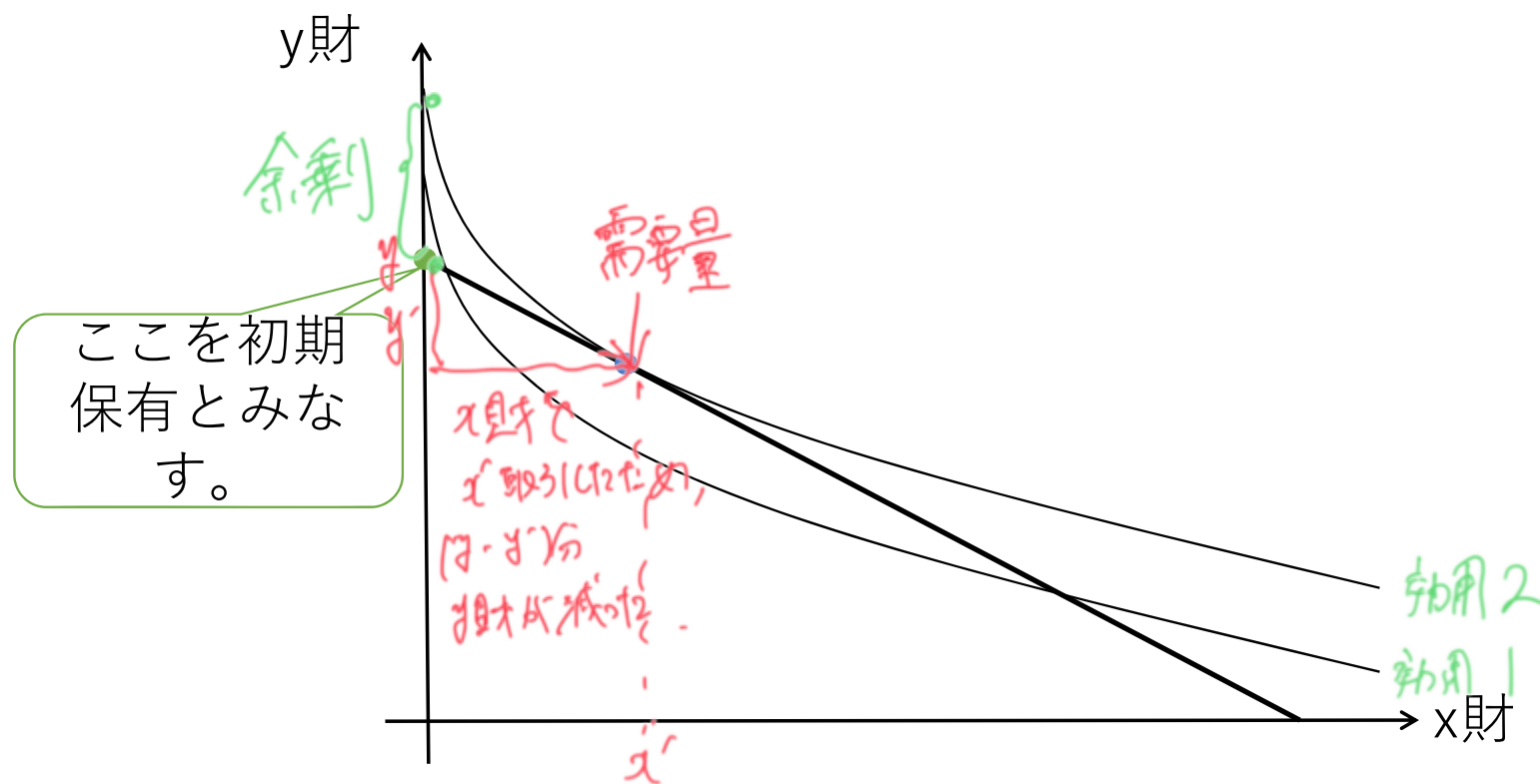
準線形な選好

- 前スライドの無差別曲線は縦軸に沿って 平行
• 縦の間隔がx財の消費量によらず不変。 (平行移動させている)
- このような無差別曲線であらわされる選好を 準線形な選好 という。
- $u_i(x, y) = f(x) + y$ およびその単調変換となるような効用関数で表現される。
- 所得効果 がないということは需要量の変化は価格比の変化による影響のみで 実質所得 の変化は無関係ということ。

準線形な選好

- 部分均衡分析の需要関数は準線形な選好を持つ消費者から導出されている（暗に）。
 - x財を分析対象、y財を他の財すべてを適量ずつ集めてきたもので**合成財**などとよばれる。
- 多くの場合、1つの財に対する支払は他のすべての財と比較して小さいので**所得効果**は無視できる。
- **余剰**はy財で測られる。

準線形選好と余剰



所得の変化と所得効果

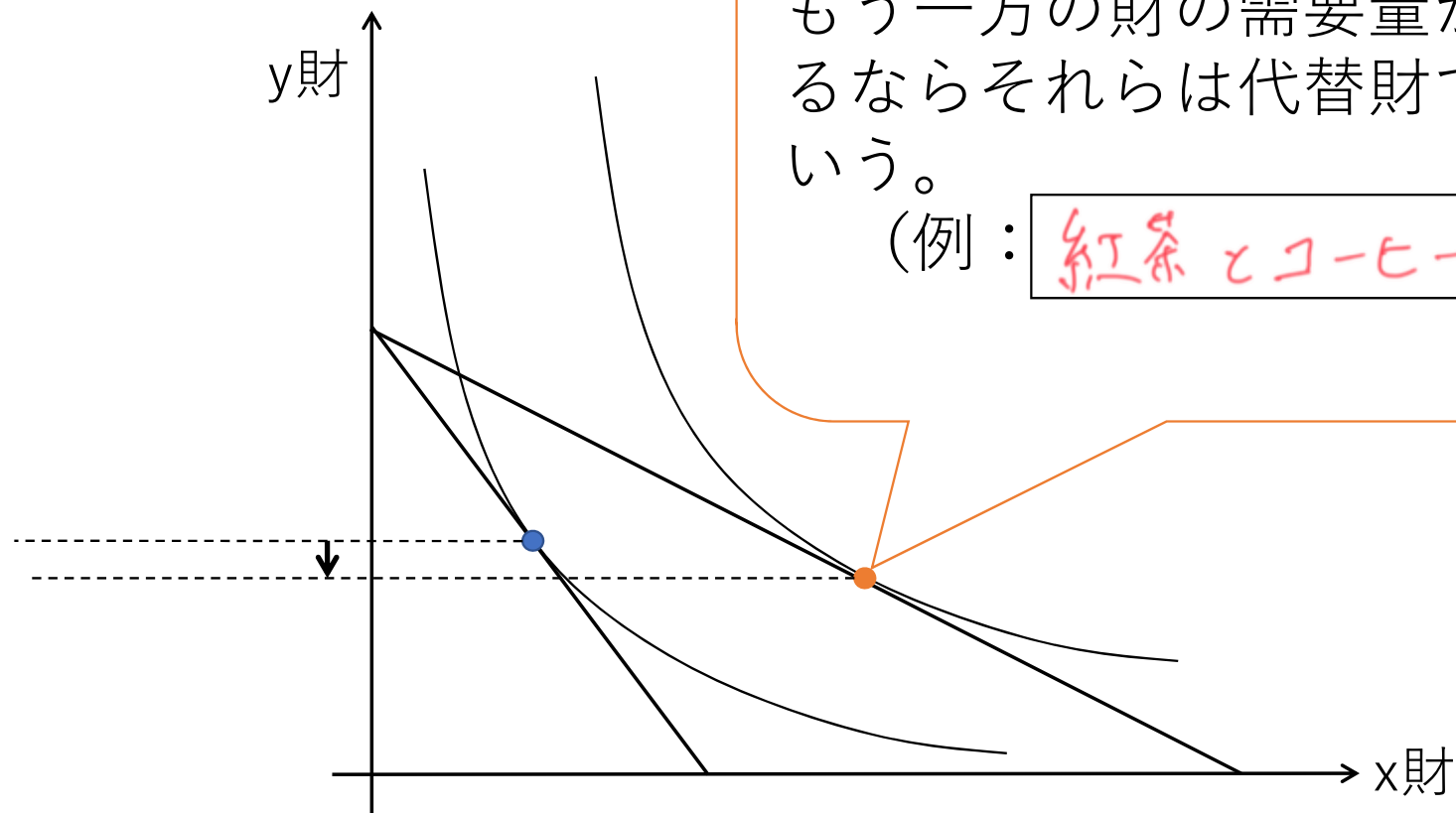
- 所得のみが変化すると、価格比(予算制約線の傾き)は変化しないので、予算制約線は平行移動する。
- 所得のみが変化したときは、所得効果のみが現れるということ。
- 所得効果が正であるような財を上級財または標準財とよぶ。
- 所得効果が負であるような財を下級財とよぶ。
例：(好みによるが)インスタント食品など。

総効果

- 代替効果と所得効果を合わせたものを総効果という。
- 総効果の方向は多様。

代替財・補完財・正常財・ギグフェン財

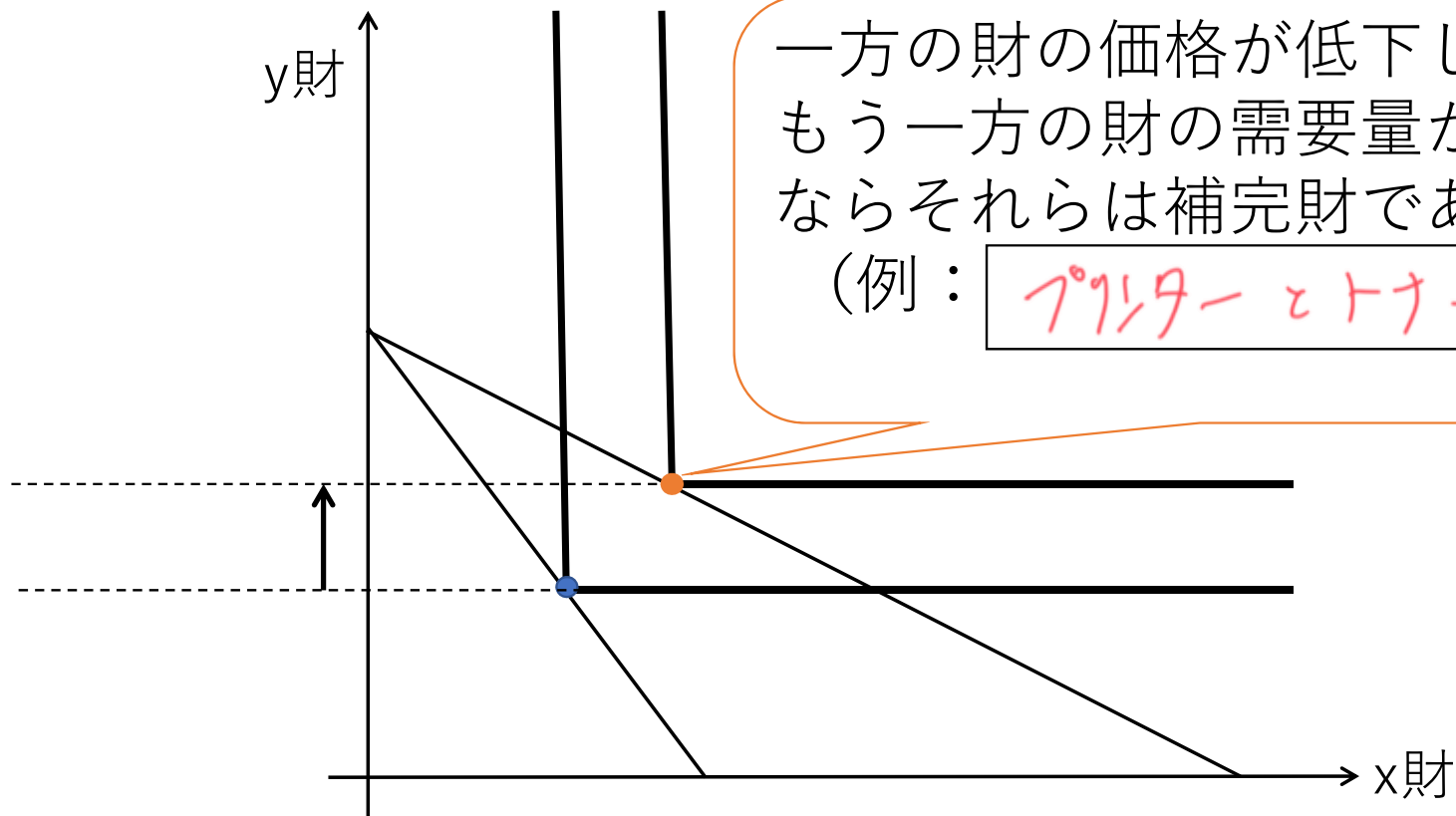
代替財



一方の財の価格が低下したとき、
もう一方の財の需要量が減少する
ならそれらは代替財であるとい
う。

(例：紅茶とコーヒーなど)

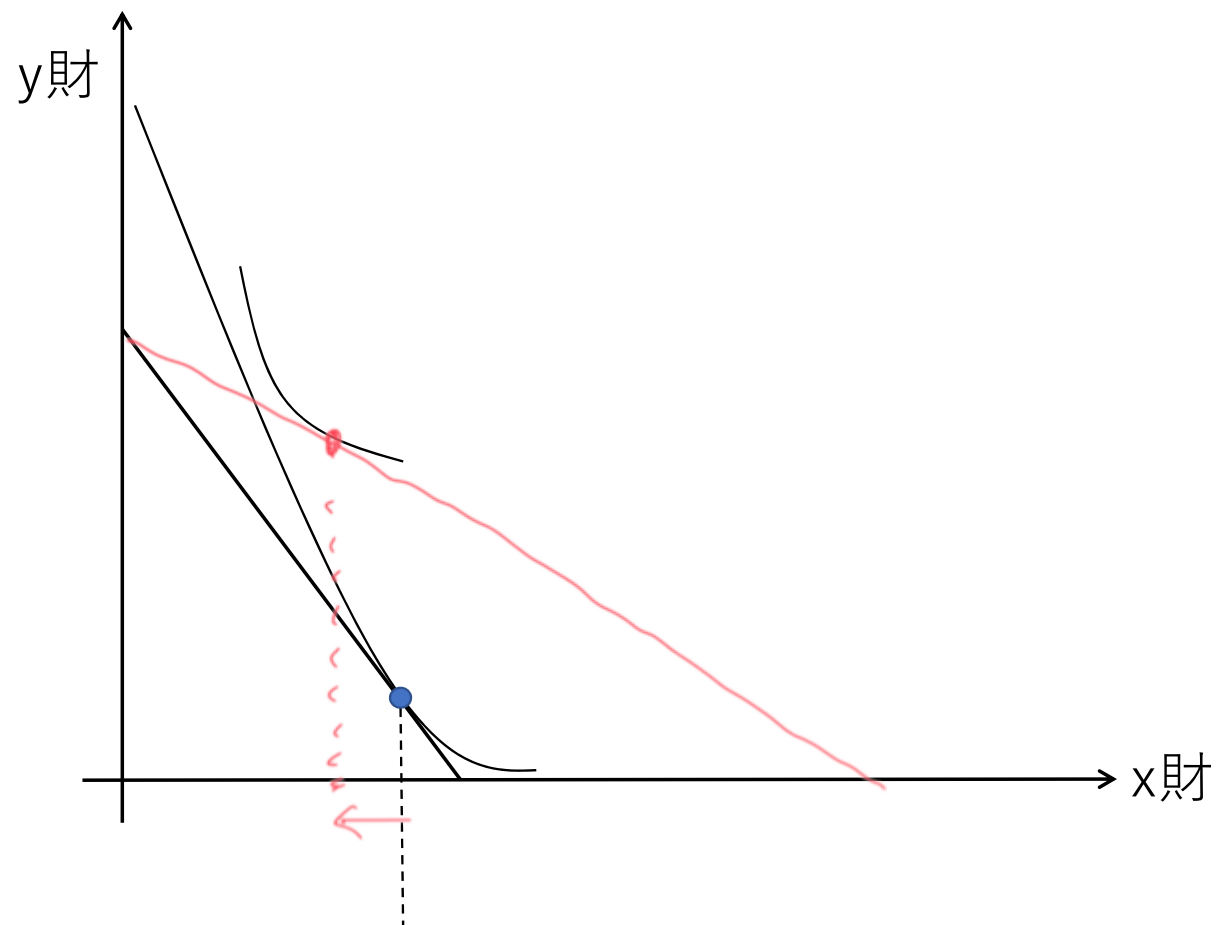
補完財



正常財とギッフェン財

- 財の価格が低下したとき、その財の需要量が増加するならば、その財は正常財という。
 - 需要法則
- 代替財・補完財の例のx財は正常財。
- 財の価格が低下したとき、その財の需要量が減少するならば、その財はギッフェン財という。
- 非常に珍しい例ではあるが、いくつか報告されている。

ギッフェン財



クイズ

- x 財, y 財ともに下級財となるような選好はあり得るか？ただし、本講義で置いた選好についての仮定のうち、完備性・推移性・連続性以外は満たさなくてもよいとする。